



名古屋市博物館だより

編集・発行／名古屋市博物館 〒467-0806 名古屋市瑞穂区瑞穂通1-27-1
TEL (052) 853-2655 FAX (052) 853-3636 <http://www.museum.city.nagoya.jp>

平成30年(2018)4月1日発行 無料
3,800部発行(年2回 4・10月)
古紙パルプ配合再生紙使用

22のテーマで語る魅惑の博物館コレクション

企画展

博物館
イキ

2018年4月28日[土]→6月10日[日]

「博物館行き」という言葉があります。一般的には、古くなったモノ、役に立たなくなったモノに使われるようです。

しかし、博物館に身を置く者としては声を大にして言いたい。

「博物館に来るものは生き活きしていますよ！」と。

名古屋市博物館は、昨年2017年10月に開館40年を迎えました。名古屋市立の歴史系博物館として誕生し、尾張を主とした地域に関わる考古、歴史、美術工芸、民俗資料を収集してきました。まったくのゼロから始まったにも関わらず、40年あまりで26万点をこえる一大コレクションとなり、そのうち九割以上が寄贈からなる、まさに市民が作り上げたコレクションと言えます。

この中には、黒楽茶碗 銘「時雨」など重要文化財に指定されるような名品もありますし、石器や土器の破片など古代の人々の活動を伝える資料、豊臣秀吉の文書のように戦国武将や人々の行動や考えを伝える文字資料、また、食や衣生活など人々の日々の

生活を伝える民具など、多種多様なモノがあります。

これらは、元々は個人が収集したものであったり代々家で伝えられたもの、また、生活の中で使っていたものですが、「博物館行き」になった後には、博物館で大事に保管されながら、標本、研究、展示資料など様々な活躍することになります。

そして、こうしたコレクションこそが、この地域の歴史や文化を語る上で欠かせない基本的な資料となっており、博物館は、現在、そして未来の市民にこれらを伝える役割を担っています。

今回の展覧会では、近年博物館が積極的に取り組むテーマから22のお勧めを選びました。この地域の歴史を伝える基本的な資料、新たな発見として注目されたもの、また、市民と一緒に進めた先進的な活動など、話題性に富んだ内容となっています。

まさに“生き活き”と活躍する資料から、現在の名古屋市博物館コレクションの魅力を知っていただければと思います。
(瀬川貴文)

企画展「博物館イキ！」では、博物館の活動を 22 のテーマを切り口として紹介します。

集める

世界に数ある博物館は何を集めるのか。その対象は森羅万象です。しかし、それぞれの博物館にはそれぞれの役割があり、収蔵空間にも限りがあるため、各博物館が方針を定めてコレクションを形成していきます。名古屋市博物館の場合は、尾張を中心とする地域、および日本の基準となる歴史資料を収集しています。

その多くは寄贈されたもので、元々は尾張藩士や代々続く家に伝わった物、コレクターが情熱と時間と時に金銭をかけて集めた物などで、これらを公にし、後世に伝えるために、博物館に託されます。ここには、資料を集めること・残すことへの熱い思いがあります。

なかには、横井庄一氏がグアム島での生活で作った道具のように、戦争に翻弄された個人の生き方を伝える唯一無二の資料もあります。

こうした思いを受け取りながら、博物館も当地域の特徴ある歴史文化を伝えるために、さらに資料を探し、時に購入するなどして、コレクションの充実に努力しています。

調べる

モノは、ただあるだけでは資料となりません。いつ、どのような材質・方法で、何のために作られたのか。様々基本的な情報を調べ、記録する必要があります。

こうした基本的な情報も、そのモノだけを見ていてはわからない場合が多くあります。学芸員は、類例を探し、先行研究を参考とします。他の博物館や研究者との共同研究も有益で、例えば豊臣秀吉の文書を集め編纂することや、いくつかの長篠合戦図屏風の比較研究でも、新しい知見が見つかりそうです。民俗資料では、物を使った人からの聞き取り調査によってはじめて分かることも多く、資料の価値が格段に高まります。多くの資料を見て、聞いて、調べて、初めて正しい位置づけができるのです。

さらに、様々な技術の進展で、科学的に資料を調べることも可能となっています。赤外線撮影や X 線撮影は、目に見えない文字や資料の構造など隠れた情報を明らかにすることがあります。

学芸員は、まずは目の前の資料と向き合うことが必要です。それらを見ながら、新しい分析方法や研究方法を模索し、資料の持つ情報（＝魅力）を最大化するのです。

22 のテーマで語る魅惑の博物館コレクション

企画展

博物館
イキ

2018 年 4 月 28 日 [土] → 6 月 10 日 [日]

休館日

月曜日（祝・休日の場合開館、その直後の平日休館）

第 4 火曜日

5/1・7・14・21・22・28、6/4

開館時間

9 時 30 分～17 時

（入場は 16 時 30 分まで）

観覧料

一般 300 (400) 円

高大生 200 (300) 円

中学生以下無料

市内在住の 65 歳以上 100 (200) 円

※敬老手帳等の掲示が必要。

他の割引との併用はできません。

※（ ）内は常設展との共通料金。



関連イベント

ギャラリートーク

毎回違う学芸員が担当した 1 テーマについてじっくり解説します。

日時 会期中の土・日・休祝日
（ただし、5 月 3 日（木・祝）はのぞく）

10 時 30 分から 20 分間程度

場所 特別展示室内（30 名程度）

講師 当館学芸員

要観覧券

フェスタ名市博 2018 ～春～

企画・実施：名古屋市立大学博物館
サポーター MARO

モノ作り、ゲーム、謎とき。名古屋
市博物館をまるごと楽しもう！

日時 4 月 28 日（土）・29 日（日）

10 時から 15 時 30 分

（受付は 15 時まで）

場所 展示説明室ほか

参加費無料（ただし、常設展示室内で行う

企画については常設展観覧料必要です。）

はくぶつかん講座

「博物館行きから活きへ～魅惑のコレクション」

日時 5 月 3 日（木・祝）

10 時 30 分から 1 時間程度

場所 展示説明室（定員当日先着 100 名）

講師 当館学芸員

聴講無料

* イベントへの参加にあたり、障害等により特別な配慮が必要な方は 2 週間前までに博物館までご相談下さい。



重要文化財 黒楽茶碗 銘「時雨」
本阿弥光悦作 江戸時代
森川コレクション



長篠合戦図屏風（部分）
江戸時代



猿猴庵の本
江戸時代



十一面観音菩薩立像 円空作
江戸時代 栢木下郷家伝来

語る

博物館の活動の中で、多くの人々との接点になるのが展示でしょう。古来、寺社での開帳であったり、見世物としてコレクションを見せることは広く行われてきました。博物館は、ただ珍しい・希少なモノを並べるのではなく、一定のテーマ・シナリオをもち、その意図が伝わるように展示します。

名古屋市博物館の展示では、名古屋・尾張を中心とする地域の歴史や文化と、日本や世界の歴史・文化を展示することを二つの大きな方針としています。

この地域で生み出されたモノは、この地域の歴史や文化を物語る証人です。石器であったり、文書であったり、博物館資料同士はもちろん、様々な資料を組み合わせることで、この地域を物語る事が可能となります。

さらに、この地域から世界へ、世界から地域へ、そうした歴史や文化のダイナミズムを物語ることもできます。



左頁：重要文化財 古瀬戸魚波文瓶子
鎌倉時代

左：名古屋めし食品サンプル
現代

下：復元されたお諏祭りと造り物



活きる

ある物が博物館に来る時、実際に使われていた実用性がなくなるため、「博物館行き」と言われます。しかし、博物館資料として新たな役割を担うことになります。例えば、標本としての学術資料、過去を知るための歴史資料、人々の心を揺り動かす展示資料となる場合もあります。捉え方でその性質は様々あり、博物館はこのような様々な性質を最大化し、資料が「活きる」ように調査研究を重ねています。

近年、博物館資料を「活用」することが様々な場面で求められています。これまでの博物館ではその大部分が展示でした。しかし、インターネットなどで容易に画像が見られるようになった現在、「見せる」だけでは、十分ではありません。それに加えて、新しい視点から活用方法を切り開いていくことも必要となっています。

例えば、江戸時代に行われたマツリを博物館資料を元に現代に復活させることで、マツリに参加する人々は歴史に学びながら現代を生きていく。こうした博物館の様々な活動に多くの人々が関わる中で、参加した人々にとっても、これまで知らなかった歴史文化の根本に触れ、知的好奇心が刺激され活き活きとなる。

名古屋市博物館はこうした新しい活動を行いながら、粹な博物館を目指していきます。

画僧月僊^{げっせん}

一よくばりおっさまの真実

江戸時代の中頃に活躍した画僧^{が そう}（僧侶の画家のこと）に月僊^{げっせん}（1741～1809）という人物がいます。名古屋に生まれ、半生を伊勢の地で過ごしました。「愛知に輝く人々」（愛知県小中学校長会編）シリーズの『よくばりおっさま』でご存知の方もいるかも知れません。今回は、この「おっさま」（和尚さま）について、紹介したいと思います。

お金に汚い和尚さま？

寛保元年（1741）、名古屋城下の醸造業を営む家に生まれた月僊は、七歳で仏門に入り、若くして浄土宗の僧侶となりました。江戸や京都で修行するかたわら、幼い頃より得意であった絵についても学び、画家としても名を馳せました。転機となったのは、安永三年（1774）、34歳の時でした。知恩院^{ちおんいん} 57世檀譽貞現^{だんよじょうげん}の命により、伊勢神宮（内宮）^{いせじんぐう ないくう}最寄りの歓楽街として栄えた古市にある寂照寺^{ふろいち じゃくしょうじ}に入山することになります。しばらくすると、月僊のことを悪く言う者が出てきます。僧侶という身分でありながら、自身の描いた絵を参拝客などに売りさばき、私腹を肥やしているというのです。実は、月僊の行動には理由がありました。寂照寺は、徳川秀忠の娘、千姫の菩提寺として建立された由緒ある寺でしたが、当時は荒廃していました。月僊は、荒れた寺を再興するために、絵を売ってお金を貯めていたのです。そればかりか、参宮街道の整備や貧民救済にも尽力しました。やがて月僊の悪名は消え去り、その徳行は今も伊勢の地で語り継がれています。

ユニークな神仙の世界

様々な社会事業の元手となるほど人気だった月僊の絵とは、一体どのようなものだったのでしょうか。月僊は、江戸にて雪舟復興^{せつしゅう}を志す桜井雪館^{さくらい せつかん}（1715～90）に、京都では写生画で一世を風靡した円山応挙^{まるやまおうきよ}（1733～95）に絵を学びました。

雪館が得意とするアクの強い表現、また応挙が得意とした写実的な表現を巧みに組み合わせ、自身の画風を作りあげます。山水画^{さんすいが}、人物画^{かちょうが}、花鳥画と様々なジャンルを描きますが、最も多くの数が伝わるのは、中国の神仙や英雄、文人を描いた人物画です。ここでは、天明四年（1784）に刊行され



広成子の図（『列仙図賛』より）

た『列仙図賛^{れっせんずさん}』の挿図を元に、月僊画の個性を見てみましょう。この本は、中国で出版された仙人の図像集にならって制作されたもので、多様な異能力者を収録しています。体育座りをしてニッコリとこちらを見つめる老人は、広成子^{こうせいし}という中国古代の仙人。しわくちゃな肉体は、一見すると異様な姿で、漫画のようにキャラクターを強調して描いているようです。ただし、奥行きのある足先や組み合わせた手のひらの描写を見ると、しっかり現実の人体を観察して描いていることが想像できます。月僊の描く人物画は、応挙から学んだ写実的要素が屋台骨となって、滑稽味のある面白い風貌を支えているものが多くあります。このバランスが月僊画の新しさと魅力であり、多くの人を魅了した理由ではないでしょうか。

名古屋市博物館では、今年の冬に月僊の画業を紹介する特別展を開催する予定です。江戸時代に人気を誇ったユニークな作品の数々を楽しみにお待ち下さい。（横尾拓真）

天正18年 秀吉の「小田原攻め」と尾張

今年2月に刊行した『豊臣秀吉文書集』第4巻は、天正17年(1589)～18年の秀吉発給文書928通を掲載しています。第4巻を通覧すると、秀吉が天正18年に小田原の北条氏に攻め込み、関東・奥羽まで統一して天下を手中に収める過程が浮かび上がってきます。この中には、尾張の様子が変わる文書もあり、当時の尾張地域と秀吉の小田原攻めとの関わりを知ることができます。

その頃尾張は

当時尾張は、織田信長の次男で清須城主の信雄のぶかつが支配していました。天正18年2月、信雄は秀吉本隊の通行にそなえて国内の街道の拡幅工事を終え、急ぎ家康の先鋒隊(30,000人)に続く主要隊(15,000人)を国内から動員して出陣します。尾張地域は後詰め的重要拠点とされ、中国大名の小早川・吉川両氏が配属されました。秀吉は前年12月4日に、小早川隆景に対し清須城に2,000人、中島郡荊安賀城に500人、吉川広家には愛知郡星崎城に500人の兵を率いて入るよう指示しています(小早川文書)。

彼らの役目は、前線である本隊への兵糧や物資の後方支援とともに、秀吉の拠点である京・大坂との情報中継です。秀吉不在の間、京の聚楽第には弟秀長と中国大名の毛利輝元が常駐しました。

ちなみに吉川広家は出兵に際し、つきあいのあった伊勢御師に「尾張・美濃地域の兵糧米調達に協力してくれ」と依頼しています(村山文書)。興味深いのは、兵糧米調達のための仲介者も紹介するよう依頼していることです。秀吉の重臣・細川藤孝も、信雄の家臣に尾張での兵糧米調達を依

頼している(名本文書)ことから、濃尾平野一帯は、秀吉軍の兵糧調達のための「米蔵」のような役割を担っており、中でも尾張はいくさの人手動員も含めて、さまざまな人材が関わっていたと思われます。

行き交う人と情報

小早川・吉川両氏は3月中に各城に入りました。秀吉は3月29日に伊豆の菰山・山中城を攻略して緒戦を突破すると、吉川広家宛てに、星崎城を小早川隆景に預けて三河の岡崎城へ入るよう命じました。戦線にあわせて、後方拠点も前進させているのです。

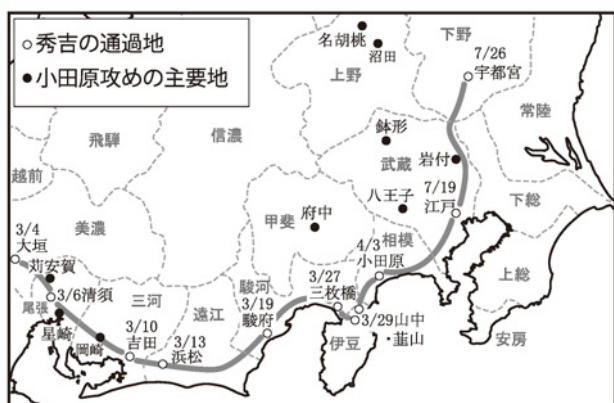
4月4日には、秀吉は側室の茶々一行を呼び寄せるため、清須の隆景に一行を清須から岡崎まで送り届けるよう指示します。隆景と広家は、伝馬や宿など、細々とした手配まで担当しました。

その他両者宛には、京に宛てた書状の配送も課せられました。秀吉は「送った馬を京へ届けよ」(5月23日小早川文書)、「書状を継飛脚で聚楽第へ届けよ」(5月24日吉川正統叙目)、果ては「囚人を京まで送り届けよ」(6月5日吉川正統叙目)と命じています。実は隆景・広家自身は5月末頃に秀吉の命で小田原に参陣しており、これらには留守居が対応したと思われます。

小田原攻めにおける尾張の位置づけ

北条方は7月5日に降伏し、秀吉は小田原城に入って北条遺領の分配「関東仕置」を行いました。この際、秀吉は家康に関東へ、信雄に家康の旧領への転封を命じました。しかし信雄はこれを拒否したため、改易されて下野へ追放されました。尾張には秀吉の甥・秀次が入り、豊臣一族の直轄地とされます。守護代時代以来続いていた、織田家による尾張支配は終わりを告げ、秀吉はついに自分の出生地を直轄しえたといえます。秀吉にとって「小田原攻め」とは、関東を手中にしたことは勿論ですが、出生の地の直轄化が叶ったという意味でも、天下統一の仕上げの合戦となったのではないのでしょうか。(岡村弘子)

『豊臣秀吉文書集』第4巻は吉川弘文館から刊行し、当館ミュージアムショップ・大手書店で発売中です。



天正18年 秀吉の行軍経路

海からはじまる古代史

古代の名古屋には「年魚市潟」という遠浅の海が入り込んでいました。この年魚市潟を南側から一望する丘陵上に氷上姉子神社と兜山古墳・斎山古墳が、その対岸の北側に突き出た岬に熱田神宮と断夫山古墳・白鳥古墳が位置しており、いずれも古代氏族「尾張氏」の祖先伝承と深い関わりが推定できる神社・古墳です。尾張氏は海洋民集団の一面をもち、海辺の民を掌握した「海部氏」と同族関係にありました。尾張南部の古代史は、海に生きるひとびとによって幕を開けたのです。



断夫山古墳の遠景と円筒埴輪
(名古屋市教育委員会蔵)

地域ごとの個性豊かな海と漁



伊勢湾は全体に遠浅の海ですが地域によって環境に違いがあります。比較的穏やかな湾奥では河川から流れ出た土砂が堆積し、貝類やボラなど汽水域に生息する魚介を対象とする漁が盛んでした。湾口に近づくとも水深の深い場所や岩礁地帯も出現し、マダコやナマコ、サバやブリなど岩礁や外海に生息する魚介を捕る漁がみられます。海的环境によって生息する魚介が異なり、さらにそれに応じて漁のしかたや人々の暮らしにも違いがありました。

貝を捕る道具「地がきかご」(館蔵)

島々を渡りゆくひとびと

日間賀島・篠島・佐久島の三つの島々は、古代以来、海を舞台に活躍したひとびとの足跡を今も留めています。島の漁業の道具や漁獲物、神事祭礼、海の民の統率者が葬られた古墳からは、伊勢湾沿岸各地との活発な交流や交易、信仰の共有など、広範囲なネットワークが伺えます。島々に生きるひとびとは外向性に長け、ときには漁民、あるときは交易民、またあるときは海の武装集団として、島々を股にかけ、地域の境界を越えて活動を繰り広げてきました。



日間賀島の漁具(日間賀島資料館蔵)

海のもをを求める文化



あらたまった贈り物に付ける熨斗は、元はアワビを干したものです。その理由としてアワビが縁起の良い食べ物であるという説明もありますが、海のものということにも意味があります。日常とは違った特別な機会、年越しに尾張北部や岐阜県南部ではイワシを食べる例があり、秋祭りに尾張北西部ではサバ寿司を食べる例があるというように、海のもを食する習慣があります。いわば特別な場面では海のもをを求めるという文化が内陸部の生活にも根付いているのです。

年越しの魚(イワシ・岐阜市)

世界最古の海水浴場

かつては療養を目的に海に入ることがあり、「潮湯治」と呼ばれました。現・知多市の大野海水浴場では、應保年間(12世紀初め)に鴨長明がこの海岸で潮湯治をしたと伝えられているため、「世界最古の海水浴場」という宣伝文句でアピールしていました。娯楽としての海水浴が一般的になり、鉄道網が整備されると、海水浴場は多くの人でにぎわうようになりました。時代によって楽しみ方は異なりますが、長い年月にわたってひとびとは海に親しんできたのです。



尾張名所図会「潮湯治」(館蔵)

尾張を代表する湊町、熱田



明治～大正頃の熱田湊(館蔵)

海に臨む岬に位置する熱田は古来、湊であると同時に海のランドマークでもありました。この一帯で築造された断夫山古墳をはじめとする大型前方後円墳や、古代寺院・願興寺の塔は、まさしく海に誇示する尾張のシンボルでした。

熱田は尾張の海の玄関口として繁栄しました。湊町、宿場町、熱田神宮の門前町、漁師町といったさまざまな町の顔をあわせもち、行楽や熱田神宮の祭礼行事、旅人や大名・海外使節の往来は熱田の町をにぎわせました。

特別展

海たび

尾張・知多の海とひとびと

2018年7月14日(土)～9月17日(月・祝)

伊勢湾の奥部に臨む尾張は、古来より豊かな魚介・海藻類や塩を産し、さらに海上交通で繁栄してきた、海に育まれた地域です。海に関わる古代史や、漁撈^{ぎょうろう}、祭礼など、特色あふれる歴史文化が今も各地に残されています。

今回の特別展は、尾張・知多地方の海の文化を知り、楽しみ、親しんでもらうきっかけにしたいと、考古学と民俗学の学芸員2人が共同で企画しました。「行ってみたくなる海の歴史散歩」をコンセプトに、盛りだくさんの展示品で知多半島と島々から名古屋周辺まで広がる海の世界をご案内します。

(藤井康隆・長谷川洋一)

休館日 月曜日(祝日・休日の場合開館、その直後の平日休館)
第4火曜日
(7/17・23・24・30、8/6・20・27・28、9/3・10)
主催 名古屋市博物館 毎日新聞社 メ〜テレ

●
特別展



資料紹介

須恵器 短頸壺

古墳時代 西区「藤之宮遺跡」出土
館蔵（中島一男氏寄贈）

名古屋市西区栄生付近で江戸時代に出土し、伝来した須恵器がこの度寄贈されました。

この資料は、昭和 28 年に発刊された『中村区史』など中村区の郷土史の本などで度々紹介されてきた。しかし、現物は公になっておらず、その実態は明らかでなかった。この度所蔵者のご理解により、博物館に寄贈いただくことができたので、その概要を報告する。

この須恵器を入れた箱には紙片が付属し来歴が書かれている。虫食いが相当進んでおり、欠損部分も多いが、全文を記しておく。

藤之宮遺跡出土品 中村区栄生町一丁目

中島桂三郎蔵

西区藤の宮通り二丁目附近を区画整理前□字藤の宮と呼びま志て往古大社がありましたそうです□/ 桓武天皇平安京御奠都の際皇室特に御由緒深□故を□して山城国に御遷座奉祭あら□□□□塚が築かれてありま志たそうですが年を経て荒廃し□川末期に至りまして北境程近き沼を埋立新田を墾くに当り二回の土入れに全く運び去られて塚は影を止めず遂に田園と化し今を去る百数年前耕作の際其遺跡より発掘したもので此壺を中心に志て小さい壺が沢山出たそうですが何れも毀損してあったとの事です。

このように、西区藤の宮通り二丁目付近（現西区栄生 1 丁目付近）に塚があったが、江戸時代末期に墾田のため消失し、その後（成文から）百数年前にこの壺と小さい壺が複数出土したことが記

されている。前述の中村区史にも、多少異なる部分もあるが同様の記述があり、この紙片が元であった可能性がある。

この伝来を読む限りは、この須恵器が塚（古墳か）が削平された跡から出土したものであることがわかる。しかし、古墳に由来するのか、その下層の遺跡から出土したものかは判断できない。

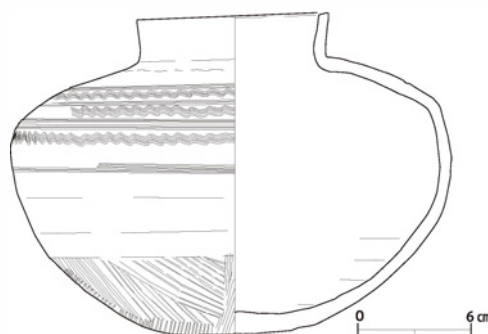
須恵器自体を見ていこう。須恵器の短頸壺で、肩部の痕跡から本来は蓋があったと判断できるが伝来はしない。口縁直径 10.2cm、体部直径 23.2cm、高さ 17.0 cm である。

頸は短く直立し、口縁端部を平らにする。肩部には自然釉が掛かっていたようだが、風化などのためほとんど剥落している。体部は扁平な球体で、体部上方を沈線で 3 段に区画し、間に波状文をめぐらせる。それほど精緻でなく、回転させながら施文する過程で、一部で重なったり、乱れた部分がある。底部はタタキ痕が残る。内面は全体を丁寧にナデ調整し、器厚は 5mm 前後で一定している。

平らな口縁端部や 3 条の波状文などは、器種は異なるが、中区那古野山古墳出土の脚付短頸壺の壺部が似る。その他の形態や胎土などからも 5 世紀中頃～後半に尾張で生産された須恵器であると判断できる。

「藤之宮遺跡」は現在遺跡（周知の埋蔵文化財包蔵地）としては把握されておらず、低地部にも遺跡が広がっていたことを示す基礎的な資料となる。

また、5 世紀は、尾張で須恵器が生産されはじめた時期であり、熱田台地上の集落遺跡（正木町遺跡や伊勢山中学校遺跡など）を中心にこの地域の初期の須恵器が出土する。一方、低地部では西区志賀公園遺跡でこの時期の須恵器が出土しており、本資料も庄内川流域を中心に人々が活発に行きかったことを物語る貴重な資料である。（瀬川貴文）



実測図 (S=1/4)